

上島の文芸

水曜会【弓削】

梅雨の蝶翅^{はね}重そうに重そうに

溜め息と共に入り来る暑さかな

紫陽花の彩待つ蕾^{つぼみ}ひしひしと

梅雨晴や孫の遊びのとめどなく

蝸牛^{かたつむり}動きたる水求めてか

贅沢^{いお}や庵の目覚めのほととぎす

新しき夢を育くみ立葵

亀島 一美

小林しぐれ

田坂 紫苑

田坂英代子

中本砂恵子

畑 弓道

森本 恵子

生名短歌会【生名】

昨日あり今日あるという倖せを明日につながらんす
こやかに生きん

無一文何も恐れる物はない妻と語りて眠りに就きぬ
村上 宗子

東京のシンボルタワーにのぼりきてビルばかりな
渡辺スズ子

義母十三回忌義父六十六回忌写真抱けど会えしか
池本 滝子

あの世の夫婦
窓越しに見える合飲^{ねむ}の花咲きても少し下さい二人
浜田伊勢子

ひとつまみ古きご飯を餌台に雀群来て祭りの始
増成 君子

婚活^{こんかつ}をしているよと孫の言うゲンジボタルの点滅
しきり
池田 友幸

むつみ歌会【岩城】

梅干しとらつきようを漬けて暫くは生きるつもり
宮本佳世子

造船所見える段畑に来てみれば新造船の出航の時
浪本 綾子

恨^{はん}のごと根深き情を沖繩にもたらすなかれ政^{まつりごと}つ人
池田 繁雄

友の孫の幼き姉妹に贈るためスケッチブック二冊
を購^{かひな}ふ
森本 和佳

ベッドにて喉の乾きを覚えをり息子のくれたるジ
ュースの旨し
森本サダ子

時惜しみ昼夜を問はず戦闘の訓練厳し特攻隊は
白石 勇

手造りの運動会の招待状天気予報が気になる前日
西本 優子

「泣いとるよ」円らな瞳で孫言へりお腹の中に蛙
がいるよ
高本 久子

魚島俳歌柳会【魚島】

独り居の気まま暮しの孤独死の来世の事を知る由
も無し
借景の山の一樹の桐の花
増井富士雄

甥祝いくれて一月余る日を咲き続くなる胡蝶蘭か
な
梅雨迫り来る柵網を上げはじむ
三上 運

句碑の字の読める人無し草紅葉
枯枝に寄り添ふ夫婦鴉かな
大船 近義

若づくりしても消えない顔の皺
致死我の日々のストレス目方減る

城山 太郎

親離れした子に世話を焼く祖父母
傘寿かと訊かれて喜寿と胸を張る

佐伯 真柳

着く港々に釣れる帰省子か
梅天に噴煙吐ける桜島

柳 小福

ヨイショつと云えば膝痛軽くなり
古稀過ぎてよりのにぶさを実感す

松原 瑞峰

春季カラスの捕獲数報告

平成22年5月23日から6月20日
までカラスの捕獲を実施しました。
9月に再度実施いたしますので
皆様のご協力を宜しく願います。

地区名	捕獲数
弓削地区	85羽
岩城地区	80羽
生名地区	50羽
魚島地区	16羽
合計	231羽

【寄付（敬称略）】 7月15日までの受付

次の方に寄附をいただきました。紙上より厚くお礼申し上げます。

- 村上 和彦 金一封 教育・文化のために
- 岩崎 美知 金一封 老人福祉のために
- 中塚いつ子 金一封 教育・文化のために
- 山上 耕司 十万円 児童福祉のために
- 筒井 誠志・筒井 郁子 金一封 ふるさと納税

かみじま歴史探訪

郷土の先輩たちシリーズ⑥

島の歌碑守 三浦敏夫



NHK記者と牧水について
対談中の三浦敏夫氏
(昭和39年2月撮影)
「島の歌碑守」より転載

芸予諸島の島々は、生活必需品であった塩の主要な生産地でした。やがて、島々は寺社や豪族の荘園とされ、年貢は塩で上納しました。その輸送もあつて海運業が発達し、室町時代、文安二（一四四五）年の海上交通の記録、『兵庫北関入船納帳』に登場している伊予の船舶は、弓削二十六隻、岩城六隻、伯方五隻で、伊予本土の港は記載されていません。先の港の船が四国本土の物資も神戸まで輸送していたのかも知れません。積み荷の多くは塩や穀物で、船の船頭（主）は、梶取りと呼ばれていました。水軍の配下に組織されることもあったのでしょうか。

江戸時代になると、岩城港は一段と整備され、松山藩の内海交通の拠点となり、多くの船乗りが活動しました。その記録「太守（松山藩主）様参勤御用日記」には、参勤交代で岩城沖を通過する御用船の送迎の実状が詳細に記載されています。御用船が接近すると、近島から烽火を揚げて連絡、水主が動員され、次の港に引き継がれました。藩主も岩城港で宿泊することもあり、島本陣が整備されました。今は岩城郷土館となっているこの建物は、島の有力者三浦家の屋敷が寄贈されたものです。他の部屋よりも一段と高い主賓の間を、松

山藩主等が利用しました。松山藩領となつてからも、岩城港は「制外の地」（自由港）とされ、瀬戸内海周辺の諸藩の藩札が松山藩の藩札と同じように通用していました（『瀬戸内諸島と海の道』山口徹編、吉川弘文館）。それを反映したように、岩城八幡神社の玉垣には、全国各地の出身者が名を連ねています。

こうした時代に、岩城島の庄屋を勤めたのが白石家で、「幕末天保の十年代になつて三浦氏がそのあとを受け継ぐ…」ようになりました（『続伊予岩城島の歴史』）。その後の様子を『岩城島』（チクマ離島シリーズ）は、次のように紹介しています。

「…新田、新畑の開発、塩田経営、回船業、木綿その他の商いなどの多角経営で繁栄した三浦家が最も隆盛を極めたのは江戸時代の後期から明治にかけてであり、村内はもろろん村外にも多くの塩田を持ち、商取り引きの相手は遠く大阪や江戸に及んだ。特に天保年間には、一族から庄屋を出すなど、村の政治、経済を一族の手中におさめ、後に、本家当主は大庄屋格に列せられ『島代官』と呼ばれていたと伝えられている。中庭をのぞむ藩主のお休みになつた座敷に座ると江戸時代にタイムスリップ！」

そうした時代の三浦家は、「内海の長者として三津の印内、竹原の頼家、…瀬戸田の三調、味野の野崎などと併称された旧家であり、島の東三と称せられ、御手洗、大三島（宗方）に出張所を設けて金融仲介業をしていた。」（『伊予岩城島の歴史』）その後、明治十六年に創立された「永全会社」の筆頭発起人も、三浦与惣治（十四代善政）で、のち社長に就任。取締役には稲本幸次郎・三浦慎平・村上寛治（生名村）が就任。「壹株二付、金参百円」の出資者は、周辺町村から募っています。

この三浦家の先祖は、はるか源平の合戦のころ、相模の国（現神奈川県）で活躍していた三浦氏で、戦国時代、永正八（一五一二）年、京都の船岡山の戦いで戦死した武将、三浦義胤の子孫が備後の三原から移住したことです。その三浦家の第十八代当主が、明治二十五年五月九日に誕生した敏夫でした。明治大学在学中から和歌に親しみ、大学を中退

して郷里の郵便局長になったところから、吉井勇や若山牧水など著名な文人とも交流がありました。特に、旅と酒を愛した歌人牧水とは、彼が創刊した短歌雑誌『創作』の同人として親交を深め、大正二年五月に海岸沿いの別荘に数日滞在したことも知られています。その間に牧水は歌集『みなかみ』をまとめます。その牧水を見送った際に、敏夫は次のように詠んでいます。

思ふこと訊きもつくさず言ひも得ず 別るる日とはなりにけるかな（『島の歌碑守』三浦敏夫遺歌集）森本稔編、宮脇英二発行より）

牧水の没後、昭和三十八年に、三浦邸に牧水夫妻ゆかりの歌碑が建てられました。

窓前の瀬戸はいつしか瀬となりぬ 白き浪たちほととぎす啼く（牧水）

わかき身に余るうれひをつつみもちて 幾日を此処に宿りましけむ（貴志子）

敏夫はその披露宴の際、次のように詠んでいます。

瀬戸の瀬を詠み給ひしは初夏なりき 君若かりき 吾若かりき

歌碑建立の悲願成就しこの島に 余生送らむ覚悟さだまる

師は曾て島守と吾を呼びにけり 今日より吾は島の歌碑守（同前、写真も同書より転載）

「歌碑守」は昭和四十二年十一月二十四日歿



岩城郷土館の庭
(正面は、若山牧水と
喜志子夫人の歌碑)
「島の歌碑守」より転載

弓削商船高専・岡山商科大学名誉教授

村上 貢 稿